

せんかん ニュース

第3号

千葉・関東地域社会福祉史研究会 会報誌

2008年3月13日

千葉・関東地域社会福祉史研究会事務局

〒174 8645 東京都板橋区前野町5-5-2

大乘淑徳学園附置 長谷川仏教文化研究所内

URL <http://www7a.biglobe.ne.jp/~chibakanto/>

E-mail ck_fukushi@yahoo.co.jp

・私の「感化教育・教護実践史」研究

佐々木 光郎（静岡英和学院大学教授）

この小稿は私の研究史スケッチである。私が、どうしてこの分野に関心を持ち、研究にいたったのか、今の私には何が課題なのかを書いてみたい。私の小学生時代の1950年代は、まだ乞食や浮浪者、旅芸人が町々村々でいた。私はなぜか子ども心に彼らの存在に親しみを持っていた。私自身もワイシャツやセーター1着も買ってもらえない、貧しい農村の子どもであった。このころの原光景が私の研究の源となっているように思う。

私は、大学院（修士）では学校教育が専攻で「教授方法論」を学んでいた。それが、できが悪いために途絶え、非行少年と向き合う仕事（家庭裁判所調査官）に就いた。もう30数年前にもなる。担当するケースのことなどで児童相談所や教護院（のち児童自立支援施設）と付き合う機会が少なくなかった。そんなおり、ふと頭をかすめた。「かつての、それも昭和戦前の非行児（少年）はどのような福祉、教育を受けて改善の途についたのだろうか」と、素朴な関心が湧いた。まだ、公務員の仕事に就いたばかりのころであったが、偶然にも、菊池義昭さん（現東洋大学）から、「福島地域福祉史をやってみないか」と誘われた。ならば、仕事で得た漠たる関心を、少し資料などから実証的に見てみようかと思った。これが私の研究史の1

頁である。

それにもう1つ。私を強く動かすもの（パトス）があった。私が籍を置いていた教育学の教育史研究では、いわゆる「できる子」ばかりの教育史であった。ようやく障がいを持った子どもの教育史が語られ始めたが、就学免除・猶予の非行児の存在はまだ捨象（無視）されていた。このことに疑問を抱き、ならば、「できない子」の存在と関わってきた先人を歴史の表舞台に登場させたいと思った。その際、当時の子どもや職員の具体的な息づかいが伝わるものをあらわしたいと思い「実践史」と名づけた。家族舎生活での暮らしや、学科・実科のすがたなどを丹念に記録しようと考えたのである。

幸いにも、私は、原資料を探索、発掘する機会に恵まれた。勤務地の転勤、異動（9回）がそのための良い環境づくりに働いたのである。先に述べたように、仕事柄、東北および関東の各地の教護院に出入りしているうちに、職員といつしか戦前の話になって、ぼつぼつと私の話が理解されるようになった。ときには、「資料室（倉庫）室にいつでも出入りしてもいいよ」と言われた。とはいっても、私の資料調査は「研究」ではなく「道楽」であった。まるで魚つりや野山の散策と同じであった。とにかく、資料を見つけること自体が楽しかったのである。調子に乗って、日本社会福祉学会や社会事業史学会などの学会で報告したり、論文らしきものを綴った。果ては、当時、同じ仕事をしていた藤原正範（現鈴鹿医療科学大学）さんと『戦前感化・教護実践史』（2000）を著わしたりした。時には、「あなた（私）の研究の今日的な意義は何ですか？」と聞かれると、「山があるから昇るだけだ」などと生意気な返事をしたこともある。自分に甘えがあった。

ところが、4年前に意外な落とし穴が待っていた。「道楽」が許されなくなったのである。いきなり研究者となった途端に世間の目は厳しくなった。悲しいことに、私は社会福祉史研究の基礎・基本を何も学んでいない。まったくの独学で今日までに至った。そのために研究者として、不可欠な先行研究を丹念に精査する作業が抜けていることと、歴史認識が非常に弱いのである。しかしながら、幸いにも、今日、長谷川仏教文化研究所の嘱託メンバーや本研究会会員に加えさせもらい、やっと研究の初歩を学ぶことができた。しかも、独り学びではなく共同の学びである。ありがたい話である。

・ 児童養護施設滝郷学園訪問

小倉 常明(淑徳大学准教授)

平成 20 年 2 月 26 日、藤森会員、小倉の 2 名で、児童養護施設滝郷学園（千葉県旭市岩井 704）を訪ねた。旭市の北西部に位置し、近隣には県の公園等があり、自然環境に恵まれた小高い場所に位置している。学園が建つ丘のしたにある真言宗の竜福寺が経営母体となっており、先代も現園長もその住職が兼ねている。



滝郷学園

当日は、2 代目の土川園長、事務長、創設期の職員である古川氏に会い、学園の歴史について話を

伺った。児童の施設となったのは、戦後、児童福祉法ができて数年を経てからで、当初は、いまの場所ではなく、寺の敷地内に施設を設け、児童の保護を行っていたそうである。

当学園を訪ねるきっかけとなったのは、藤森会員の戦後の社会事業施設研究のなかで、民間の精神障がい者処遇をしていた寺院があることを知り得たからである。

竜福寺では、江戸時代から寺院内に精神障がい者を收容し、滝に打たせる民間療法を施し、治療にあたっていたという歴史があるそうで、その滝は現在も残っていた。現在、精神医学の角度からの研究対象にもなっていて、関西の大学の研究グループも訪ねてきているとのことである。



訪問の様子

制度の改正などにより、精神障がい者への治療は、精神科医でなければいけなくなり、方向転換を図る必要性に迫られた。時代的に戦

災孤児が多数発生している社会状況を鑑み、児童の保護を行うこととなったようである。主として初代園長が創設に携わったそうであるが、その片腕として補佐した椎名氏（故人）が、その事務方を担っていたそうである。

事務長の案内で、戦後の資料の一部が残されていることも確認してもらい、今後の資料整理は藤森会員を中心に実施させていただくことを依頼し、快諾を得た。

．その他

都県別運営委員会報告

第3回都県別運営委員会を12月7日（金）に開催しました。出席委員は、三好一成、宇佐美正利、小倉常明、藤森雄介、古宇田亮修、菅田理一の各氏で、研究誌第33号の編集、例会計画検討を行いました。

第4回都県別運営委員会を2月22日（金）淑徳大学（池袋サテライト・キャンパス）にて開催しました。出席委員は、梅原基雄、菅田理一の各氏で、研究誌第33号の編集を行いました。

2008年度の研究総会を7月中に開催予定です。決定次第お知らせいたします。

編集後記

会員を募集しております。メール、FAX等でご連絡いただければ事務局より入会資料をお送りします。ホームページでも会の概要をご覧頂けます（URLは1頁上段）。

事務局へメール等にて、皆様からの話題、ご意見をお寄せ下さい。宜しくお願い致します（R.S）